

図書館学教育部会 平成 15 年度 第 2 回研究集会アンケートより

(アンケート回収数 28 参加者数 45 回収率 62%)

質問 1. 部会員かどうかお聞かせ下さい。

日本図書館協会会員・教育部会会員	9 名
日本図書館協会会員・教育部会非会員	16 名
日本図書館協会非会員	3 名

質問 2 今回の研究集会のテーマの設定はいかがでしたか。

適切	25 名
適切でなかった	1 名
どちらともいえない	2 名

質問 3 今回のプログラムの設定はいかがでしたか。

適切	22 名
適切でなかった	2 名
どちらともいえない	1 名

質問 4 今回の研究集会の内容はいかがでしたか。

適切	23 名
適切でなかった	2 名
どちらともいえない	2 名
無回答	1 名

質問 5 今回の研究集会に関してご意見・ご指摘等、自由にご記入ください。

<p>図書館員の方が授業の一端を担うことに関心があった。大学のカリキュラムに取り入れることは、各大学の考え方によると思うし、職員をそのような形で生かせることは幸せだと思う。学生にも、職員にも効果があったということで、何よりだと思う。</p>	<p>現場の図書館員の方々の部会にも同じテーマを投げかけてみてはどうかと思う。今回は専ら大学図書館が対象であったので、大学図書館部会に、次回が公共図書館なら公共図書館部会に・・・と、部会を越えて討論できるテーマであると考えました。</p>
<p>大学図書館に派遣職員として勤務している私にとっては雇用と給与の問題は切実な問題であったので、この集会は非常に興味を持って聞きました。学芸員が教育者をかねているので、司書の教育者としてのスキル向上は重要でもあります。私はこのような司書が積極的に教育にたずさわるべきであるけれども、私は派遣の身であり、時間的な余裕はとれるが、費用がないため、慶應の実務者向け大学院に学びたくても学べないので、専門性を高める司書のモチベーションを向上させるうえで、制度改革は必要だと感じました。司書課程の教員とのコミュニケーションは絶対必要だと実感します。</p>	<p>図書館に直接関わっている方々が主な参加者でしたので、パネルディスカッションの時間が現場の実情を垣間見られたり、新たな試みを図書館でスタートさせる際の、当時の問題やその打開策がうかがえたことは、直接図書館員でもない私にとっても貴重なお話でした。このようなお話が拝聴でき、何らかの場面で自分の仕事や生活に関連させていきたいと考えております。そういう意味では、参加者の方がうまく尋ねられない部分を、代わって下さった二村先生には感謝申し上げます。今回の研究集会の準備に関わられた皆様にお疲れ様でした。「時間を作る」ということについてはどこの業種でも難しい点だなと感じました。</p>
<p>テーマに誘われて、初めて参加させていただきました。日々、カウンターでの業務での学生に対するレファレンスサービスに大いに参考になるものでした。ありがとうございました。</p>	<p>以前から A 先生から依頼を受けて 20 分、B 先生からの依頼で 40 分というように、単発的に授業の中で話すということをやってきました。近年医学教育も問題解決型にシフトしてきており、依頼が増える傾向があります。それぞれの依頼で何を入れ込むのか、配分・バランスに苦慮するようになり、もっと体系的なものを図書館側から提案すべきではないかと考えているところです。そのため、参加しました。明大・京大の事例が非常に参考になりました。</p>
<p>1) 授業 (カリキュラム・シラバス) の中で、図書館の協力なし (資料他) では進まないような工夫が必要でないでしょうか。授業と図書館が協同する工夫。 2) 図書館 (or 大学) の使命を明確にすることが必要だと思います。 3) アメリカ etc. の良い事例を PR。</p>	

<p>大野さん、江上さんの報告はとても身近に感じ興味深く拝聴させて頂きました。2氏の報告を聴いて思ったのは、大学ではいろいろなこと（情報検索を学生に教える）をやっているのは理解した反面、高校から下の教育機関でも似たようなことができないのか？と思いました。高・中・小学校等で検索技術などの図書館教育ができれば大学ではもう少し高度な技術を教えられると思います。参加者名簿を見ると、公共図書館の人が参加していない現状が残念だと思います。図書館という1つの枠でいうなら、このような集會に公共図書館員が参加していないのは「もちはもち屋」という、変な壁があるからなのか？と思いました。</p>
<p>とても勉強になりました。（京大の江上先生へ）ベッカー先生の教え方は極めて常識的なアメリカ式教育方法の典型と考えます。</p>
<p>とても参考になりました。職場で何か実現させられるかと言ったら現状ではできないことばかりですが、個人の認識として専門性のある図書館員と思われるための努力をしていかねばならない、また館員が全員がその共通認識を持つことからスタートしなければ何もはじまらないことを実感しました。</p>

<p>図書館の業務モデルの話がほとんどでて来ず、利用教育の話であった気がする。テーマからすべてはずれているような集會はいかがなものか。つまるところ、どんな業務モデルになるのですか？</p>
<p>二村先生の趣旨説明は非常に informative で有効でしたが、パワーポイントの画面表示時間が少なく、「見る」と「聞く」が十分にできませんでした。同じく、三浦先生の基調講演についても同様。是非、パワーポイント画面のプリント・アウトをお願いいたします。</p>
<p>1) パワーポイント資料のレジメ化。もう少し工夫を： 小さい文字が見えない； もう少し大きくコピーして欲しい。2) 日付の誤りなど資料中の大きな誤りは、事前に修正してあげたら良いのでは。</p>
<p>司会、コメンテーター、部会長の方々の適切なコメント、ナビゲーションによって、この問題について理解を深めることができた。今後、図書館学教育はどうあるべきか次回以降の研究集會に期待したい。</p>
<p>次回にも期待しています。</p>
<p>教育部会員の参加がこれだけ13名でよいのだろうか。</p>
<p>直接関係ありませんが、昼休みに書籍の販売があるのはありがたいことです。</p>
<p>広く関心を持つべきテーマ設定であったと思います。</p>

質問6 教育部会の活動全般に関して、ご意見・ご指摘等、自由にご記入下さい。

<p>教育現場への提言を積極的に働きかけてほしいです。</p>	<p>市販されている司書教育の教科書はもっと検討されなければならないのだろうか、教育部会全体として責任を持つべきだろう。</p>
<p>「教育部会」が何かわからないままテーマにひかれて参加しました。必要とされる司書の育成が非常に重要と身にしみてわかりました。</p>	<p>電子政府、電子自治体の動向を、図書館との関係も含めてテーマとして欲しい。</p>
<p>研究集會の成果などを広く広報してください。対外アピールをもっと行ってください。</p>	<p>満足しています。感謝しております。</p>
<p>1) 部会会員の参加が少ないと感じます。2) 学校図書館、専門図書館の関係者（代表者）の参加を求めたら如何でしょうか（相互参加）。3) 教育現場（教師；小・中・高）へもPRして参加を促したら如何でしょうか。</p>	<p>今後とも、有意義な議論を期待しております。</p>

2004 年度 日本図書館協会図書館学教育部会総会議事録

日時：2004年4月29日(木)11時～11時40分
 会場：日本図書館協会会館研修室
 出席者：出席26名、委任状103名の計129名(部会員数251名)

まず糸賀雅児部会長(慶應義塾大学)より会勢が報告された後、総会が成立することが確認された。引き続き、議長に塚原博氏(実践女子大学)、議事録署名人に中西裕氏(昭和女子大学短期大学部)を選出し、審議に入った。

1. 2003 年度主要活動報告

以下の活動に関して岡田靖幹事(鶴見大学)より報告され、了承された。

1) 部会総会

日時：2003年4月29日(火)
 場所：日本図書館協会会館研修室
 議題：2002年度事業報告および決算、第23期図書館学教育部会選挙結果報告、2003年度事業計画および予算

2) 第89回全国図書館大会(静岡) 第10分科会

日時：2003年11月28日(金)
 場所：静岡県男女共同参画センター「あざれあ」第1研修室(静岡市)
 テーマ：司書養成の制度と仕組みの再構築
 報告者：鈴木正紀(文教大学越谷図書館)、池田剛透(多摩大学メディア&インフォメーションセンター)、植松貞夫(筑波大学図書館情報専門学群長)、高山正也(慶應義塾大学文学部)

3) 研究集会

[第1回]

日時：2003年4月29日(火)
 場所：日本図書館協会会館研修室
 テーマ：図書館学教育と図書館現場の将来：「研究/教育/現場」－「知」のトライアングルを求めて－
 報告者：栗袋秀樹(筑波大学)、常世田良(浦安市立中央図書館長)、小川俊彦(NPO図書館の学校・編集人)、竹内紀吉(日本図書館協会経営委員長)

[第2回]

日時：2004年3月13日(土)
 場所：日本図書館協会会館研修室
 テーマ：図書館の業務モデルと教育モデル(1)：図書館業務モデルの崩壊と再構築－教育機能に求める司書の専門性－
 報告者：三浦逸雄(東京大学大学院)、江上敏哲(京大)

学附属図書館)、大野友和(明治大学図書館)、小西和信(国立情報学研究所開発・事業部次長)

4) 司書資格取得者の就職状況等調査：報告書編集作業が行われ、今夏刊行予定

5) 部会報発行(第67号～第69号)

6) 部会幹事会開催状況

[第1回]2003年4月15日(火) 於 慶應義塾大学三田キャンパス新研究棟文学部会議室

[第2回]2003年5月31日(土) 於 慶應義塾大学三田キャンパス新研究棟研究会会議室

[第3回]2003年9月20日(土) 於 慶應義塾大学三田キャンパス新研究棟研究会会議室

[第4回]2003年11月8日(土) 於 慶應義塾大学三田キャンパス新研究棟商学部会議室

[第5回]2003年11月27日(木) 於 静岡県男女共同参画センター「あざれあ」第1研修室

[第6回]2004年1月24日(土) 於 清泉女子大学本館B会議室

[第7回]2004年3月13日(土) 於 日本図書館協会会館501会議室

2. 2003 年度決算報告

田中岳文幹事(東海大学)より、2003年度の会計決算報告が行われ、併せて藤野幸雄氏、渡辺信一氏(同志社大学)両監査から会計監査が無事終了した旨が報告され、了承された(表1)。

表1.<2003年度決算報告>

1. 収入の部 (単位：円)

費目	予算	決算
部会費収入	500,000	470,000
事業収入	30,000	75,000
部会交付金	180,000	180,000
研究集会助成	100,000	100,000
雑収入		0
繰越金	360,318	360,318
合計	1,170,318	1,185,318

2. 支出の部 (単位：円)

費目	予算	決算
事務用品費	5,000	2,435
振込手数料	20,000	14,980
通信費	160,000	88,275
交通費	330,000	74,000
会報等印刷費	300,000	283,112
研究会等費	250,000	152,124
調査・編集費	50,000	0
予備費	5,318	2,000
事業積立金	50,000	50,000
繰越金	0	518,392
合計	1,170,318	1,185,318

3. 2004年度事業計画案

糸賀雅児教育部会長より、2004年度の事業計画について以下の通り提案があり、議案の一部修正後承認された。

- (1) 2004年度全国図書館大会(高松)分科会の運営
- (2) 研究会の開催(年度内に2回程度)
- (3) 専門職員認定制度特別検討チーム(第三次)への協力、委員の派遣
- (4) 都道府県職員のための図書館経営セミナー(仮称)の共催(図書館経営委員会・図書館学教育部会共催)
(専門職員認定制度への意見聴取と普及を図るため)
- (5) 部会報の発行(年度内に3-4回程度)
- (6) 「日本の図書館情報学教育2005」の調査・編集
- (7) 第24期図書館学教育部会役員選挙の実施
- (8) その他
 - a) 幹事会(年6-8回開催)
 - b) 日独図書館学教育シンポジウム事業の後援(東京ドイツ文化センター主催・日本図書館協会(国際交流委員会、図書館学教育部会)後援)
 - c) 司書資格取得者の就職状況等調査報告書刊行

4. 2004年度会計予算案

田中岳文幹事より2004年度会計予算案が提案された。議案の一部修正後、下記の通り承認された。(表2)

表2.<2004年度会計予算案>

1. 収入の部 (単位：円)

費目	予算額	摘要
部会費収入	500,000	250名(件)と想定
事業収入	75,000	研究会資料費など
部会交付金	180,000	日本図書館協会より
研究会助成	100,000	日本図書館協会より
事業積立金より	50,000	
繰越金	518,392	2003年度会計より
合計	1,423,392	

2. 支出の部 (単位：円)

費目	予算額	摘要
事務用品費	5,000	部会運営用事務用品など
振込手数料	20,000	部会費振込など
通信費	160,000	部会報等発送など
交通費	330,000	幹事会交通費など
会報等印刷費	350,000	部会報発行関係など
研究会等費	300,000	講師交通費など
調査・編集費	150,000	「日本の図書館情報学教育2005」調査編集および就職状況等調査報告書の刊行
予備費	8,392	
選挙管理費	100,000	第24期図書館学教育部会役員選挙の実施
合計	1,423,392	

5. 質疑応答・その他

・監査から会計担当幹事の職務が大変であり、担当幹事を2名に増やしてはどうかという指摘があり、部会長は、幹事の役割分担等を改善すると回答した。
 ・現在の司書課程のカリキュラムは1997年から開始されており、そろそろカリキュラムの総括を行い、カリキュラムの改善を行うべきではないかとの意見が出された。部会長は、カリキュラムの問題点等について見ていきたいと回答した。



(2004年度第1回研究会の風景)

2004年度第1回研究集会

『図書館の業務モデルと教育モデル(2)』大学導入教育にみる大学改革への挑戦：司書の可能性と限界

～ 報 告 ～

2004年度第1回研究集会は標記のとおり、日本図書館協会館研修室において午前中の総会に引き続いて、午後1時より開催された。

糸賀雅児部会長の挨拶のあと、野末俊比古氏（青山学院大学文学部）をコーディネーター、大庭一郎氏（筑波大学図書館情報学群）をコメンテーターとして、「単なる情報教育、図書館利用教育にとどまらず、大学入学後の初期の段階に新入生に対して大学の授業になじんでいくための教育、すなわち導入教育が必要」になっている現状とそのなかにおいて大学図書館及び図書館員がどのようにかかわるのか、また、どのような課題があるのか、そして図書館員すなわち司書の養成について図書館学教員はどうすればいいのかということを考えるというテーマ設定の趣旨に基づいて講演、事例発表の後、パネルディスカッションが開催された。

最初に、高等教育、継続教育が専門で、さまざまな実態調査でも中心的な役割を果たし、わが国における導入教育研究の第一人者である山田礼子氏（同志社大学文学部）の「大学の導入教育における図書館員の役割」と題して、「導入教育が日本のなかでどのようにひろがっているのか、それが図書館とどのようにかかわっていくべきなのか」という論点からの基調講演があり、参加者全員の「導入教育」に対する共通理解を促した。日頃図書館学教育の領域にのみ留まっている者にとっては「目からうろこが落ちる」、多くの示唆に富む内容であった。

続いて、導入教育の一環「情報リテラシー」教育に図書館員として関わっている二つの事例発表があった。

まず、市古みどり氏（慶應義塾大学日吉メディアセンター）の発表「慶應義塾大学日吉メディアセンターにおける『情報リテラシー教育』への取り組み」があった。日吉キャンパスは、文・法・経済・商・理工・医の6学部の1・2年生約1万1千人が在籍する。それだけに導入教育、「情報リテラシー教育」が重要である理由がある。大学及び図書館・メディアセンターの規模、特に予算・資料購入費は学生用7000万円、教員用1億2000万円などバックグラウンドもさすがに超一流であることが感じられた。図書館から積極的に指導時間を買って出ており、

「講義テキスト『情報リテラシー入門 2004』（64p）を制作・使用するなど意欲的な姿勢が感じられる発表であった。

次に、杉田いづみ氏（三重大学付属図書館）の発表「三重大学付属図書館平成15年度情報リテラシー支援事業について」があった。三重大学では1学年5学部36クラスという手ごころな規模であることから全クラスに教育支援事業としての学部初期段階の講習会、すなわち情報リテラシー支援教育を実施している。情報リテラシー教育支援を通して実現すべき大学図書館サービスにまで言及する内容であった。

暫時休憩後、パネルディスカッションに入った。下記の3点を中心に質疑応答を含めて進められた。

- (1) 「導入教育」のとらえかた（内容・方法）
- (2) 導入教育における図書館・図書館員の役割
- (3) 図書館情報学教育、図書館員（司書）養成教育のあり方

導入教育の外注はできないかという質問があったが、「アメリカ1年次調査2002」では「1年次教育内容の重視度」の最も高い項目は「大学のへの帰属意識」である。レポートの書き方といった平均的な内容はアウトソースできるだろうが、建学の精神とか大学の理念や目的といったような各大学独自の事項、図書館の利用法なども各大学それぞれ独特な部分があるので、大学・学部教育として実施してこそ効果が上がる。大学コミュニティづくりなどを通して、学生のモチベーションを高めていくことが必要である。

「情報リテラシー」教育は1年次だけではなく、その後はどうつなげていくかという課題がある。

「情報リテラシー」教育は図書館の評価だけではなく、大学の評価を高めることにつながるべきものである。

大学の導入教育は、高等学校段階で問題発見、問題解決の学習が徹底すれば導入教育は必要でなくなるのかも知れない。しかし、別の側面で大学のコミュニティづく

りとしての1年次プログラムは必要である。

「情報リテラシー」教育という新しい業務と従来の図書館業務とのかねあひ、また「情報リテラシー」教育において図書館が行うべき範囲、利用者の情報リテラシーを高めていくことを考えられる司書を現在の図書館情報学教育のなかでどう養成するかを考え取り込んでいくことの必要性、それに対する図書館情報学や司書課程担当教員の工夫努力などが討議された。前回に引き続き大き

なテーマであったが、無理に何か結論をまとめるということではなく、論点を洗い出すという方向で討議が進められた。事前申込35名、当日申込を加えて約50名参加があった。予定時間を過ぎるまで熱のこもったパネルディスカッションが展開された。参加者は各自の研究・教育・実践に役立つヒントを持ち帰ることができる実り多い研究集会になった。

(九州国際大学 福永 義臣)

基調講演

大学の導入教育における図書館員の役割

山田 礼子 (同志社大学文学部)

導入教育の定義

- 1年次教育と1年次支援プログラムを包含した内容
- 1年次教育は正規の教育課程内で実施
- 1年次支援プログラムは正規外の活動も含む 例: オリエンテーション・キャンパス 課外学生支援サービス等

導入教育の普及の背景

- 大学大衆化の促進
- 学生の変容
- 教師との関係の変容
- 教員の持つ「教員文化」と近年の「学生文化」との大きな隔絶
- 学びの変化 大学が教育の場へ

大学教授の分類

- ラテンタイプ
「教育を最も重視する教育志向型」
- アングロ・アメリカンタイプ
「研究と教育の両立型」
- ドイツタイプ
「研究を最も重視しているという研究志向型」

京都大学 江原武一氏分類による

大学教授のタイプ分類 (2)

- ラテンタイプに属する国々
ロシア、チリ、メキシコ、ブラジル
- アングロ・アメリカンタイプに属する国々と地域
米国、オーストラリア、香港
- ドイツタイプに属する国々
イスラエル、ドイツ、スウェーデン、日本、オランダ

大学と学生 その関係

私立大学全国学部長調査

実施時期
2001年 10月～11月: 1170学部

回答学部: 638学部

回収率: 54.4%

学生の現状は実際に様々な言説とおりであるか? 学力低下等?

大学の学生をめぐる諸問題への対応状況は?

大学の対応の必要性 1998年調査より

- 私立大学 国公立大学よりも導入教育の必要性を強く認識
- 学力、学習意欲、社会生活等の側面で学生に対応する必要性が強い
- 効果は導入教育の導入時期が早いほど高い

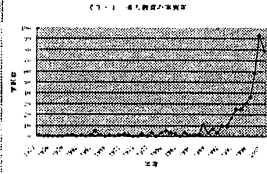
-5年前と比較した学生の現状 1～5点(1が低くなるほど高くなる)

	度数	平均値	標準偏差
読解力	594	2.22	.77
文章表現力	595	2.20	.80
数理能力	588	2.25	.81
外国語能力	594	2.40	.89
学問への関心	592	2.45	.81
コミュニケーション能力	595	2.81	.84
一般常識	594	2.30	.74
礼儀マナー	595	2.36	.81
課外活動	594	2.53	.83
ボランティア	593	2.58	.71
プレゼンテーション力	592	2.70	.85
受講態度	594	2.64	.87
社会への関心	594	2.51	.79

導入教育の実施形式

- 授業として行う場合が536件 (84.3%)
- オリエンテーションや合宿などの授業以外のプログラムが468件 (73.6%)

導入教育の実施年



実施年の特徴

- 早くから実施しているとする学部がごく少数
- 1991年を超えて実施数が増大の一途をたどっている
- 学生の学力低下が注目を浴びようになった1999年を境に急増

学部・学科	実施校数
総合教養部	1914
文学部	1890
経済学部	1814
法学部	1673
工学部	1532
理学部	1222
農学部	211
芸術学部	121
専門職大学院	121
その他	229
合計	8292

導入教育の科目名称

- 基礎演習や専門基礎演習を中心としたゼミナール型
- 専門教育のための基礎的知識を習得する基礎・基盤型
- コンピュータの操作技術を学ぶ情報リテラシー型
- 少数の補習教育
- 専門教育の一環型

導入教育の現状

2001年度調査より

- 「学生生活における時間管理や学習習慣の組織化」、「学問や大学教育全般に対する励みづけ」等からなるスタンダード・ソーシャルスキル習字においてはほとんど学系上の差はみられない
- 授業に学習スキル重視度が低く、人文系が高い
- 情報資源活用スキルの重視度は人文系が高い
- 教科補習は理系の重視度が高い

学生の導入・1年次教育へのニーズ調査

- 2001年度調査にもつぎ学生への導入・1年次教育へのニーズとプログラム評価を実施
- 2003年7月 対象校 8校9学部
- 選定基準 特徴ある導入・1年次教育教育実施校
- 回答学生数と学年 1632人 1年次生と一部2年次生

日常の学習習慣(大学での学習習慣) 1. していない 2. あまりしていない 3. たまにしている 4. 日常的にしている

項目	度数	最小値	最大値	平均値
Q8.9) 授業の課題はきちんと出す	1611	1	4	3.46
Q8.3) 辞書を活用する	1611	1	4	2.96
Q8.6) 授業での資料を整理する	1611	1	4	2.80
Q8.8) 黒板に書かないことでもノートをとる	1609	1	4	2.85
Q8.7) 図書館を利用する	1611	1	4	2.59
Q8.7) ノートは、提出の工夫をする	1610	1	4	2.51
Q8.11) 授業の復習をする	1608	1	4	2.22
Q8.10) 授業の手習いをする	1608	1	4	2.10
Q8.5) 新聞の政治・経済・国際面を読む	1606	1	4	2.08
Q8.1) 雑談論文を読む	1611	1	4	1.91
Q8.4) 教科書以外の英語の文献を読む	1607	1	4	1.84
有効なケースの数(対応)	1585			

試験にむけての学習習慣 1. していない 2. あまりしていない 3. たまにしている 4. 日常的にしている

項目	度数	最小値	最大値	平均値
Q8.13) 試験前に教科書・参考書を読む	1607	1	4	3.21
Q8.12) 試験前に授業ノートを読む	1608	1	4	3.21
Q8.15) 試験前に授業内容をまとめる	1607	1	4	2.90
Q8.14) 試験前に補足的な調べをする	1607	1	4	2.73
有効なケースの数(対応)	1604			

授業のなかで指導してほしいサービス 1. 欲しいない 2. あまりして欲しいない 3. やや指導してほしい 4. 指導してほしい

項目	度数	最小値	最大値	平均値
Q7.1) 必修・選択単位制度や卒業要件(授業)	1588	1	4	3.16
Q7.2) 履修登録の具体的な方法(授業)	1581	1	4	3.09
Q7.5) 利用できるサービス(就職指導)(授業)	1569	1	4	3.09
Q7.8) 学習上の課題に関する相談方法(授業)	1570	1	4	2.98
Q7.3) 学内施設・設備の利用方法(授業)	1575	1	4	2.80
Q7.6) 心理相談・カウンセリングの利用方法(授業)	1564	1	4	2.56
Q7.10) 教員との話し方(授業)	1570	1	4	2.49
Q7.11) ネットのメール(授業)	1558	1	4	2.46
Q7.12) 教通・同僚の態度への影響(授業)	1567	1	4	2.36
Q7.7) ネット・パソコンの活用方法(授業)	1568	1	4	2.32
Q7.9) 交友関係の築き方(授業)	1565	1	4	2.18
有効なケースの数(対応)	1521			

授業以外で指導してほしいサービス 1. 欲しいない 2. あまりして欲しいない 3. やや指導してほしい 4. 指導してほしい

項目	度数	最小値	最大値	平均値
Q7.5) 利用できるサービス(就職指導)(以外)	1539	1	4	3.13
Q7.4) 利用できる制度(留学)(以外)	1535	1	4	3.05
Q7.1) 必修・選択単位制度や卒業要件(以外)	1534	1	4	3.02
Q7.2) 履修登録の具体的な方法(以外)	1536	1	4	3.01
Q7.9) 学習上の課題に関する相談方法(以外)	1539	1	4	2.96
Q7.3) 学内施設・設備の利用方法(以外)	1532	1	4	2.78
Q7.6) 心理相談・カウンセリングの利用方法(以外)	1543	1	4	2.69
Q7.11) ネットのメール(以外)	1542	1	4	2.51
Q7.7) ネット・パソコンの活用方法(以外)	1531	1	4	2.46
Q7.12) 教通・同僚の態度への影響(以外)	1545	1	4	2.46
Q7.10) 教員との話し方(以外)	1540	1	4	2.41
Q7.8) 交友関係の築き方(以外)	1545	1	4	2.23
有効なケースの数(対応)	1481			

学生の要望と求められる教育とサービスの形態

- 学生の要望を前提とした教育サービスの必要性
- 導入・1年次教育などの充実
- 授業以外での学生支援の充実
- 教育中心の大学へと舵をきらざるを得ない大学の増加
- 研究の推進との矛盾

アメリカにおける1年次教育の特徴

- 正規課程における1年次教育と課程外での1年次支援プログラムの融合
- 学生サービス、教務サービス等の融合を可能にするような組織的構造
- 教員、職員、図書館司書、学生サービス専門職、キャリアサービス職員との連携

1年次教育の内容

- 移行期支援型
 - オリエンテーション、学習技術、自己管理等
- 学際テーマ型
 - オリエンテーション、学習技術
- 学園導入型
 - 特定の学問分野への導入
- 補習・学習技術支援型
 - ハイリスク学生への支援

1年次セミナーの到達目標

- 「キャンパス資源設備のオリエンテーション」
- 「1年次から2年次への進路継続率の向上」
- 「ファカルティとの交流機会の提供」
- 「社会生活スキルの向上と円滑な人間関係構築」
- 「分析能力、批判的思慮技術の向上」
- 「新入生のセルフエスティームの向上」
- 「キャンパス・コミュニティ概念の確立」
- 「学習技術の獲得」
- 「全般的成績向上」

教授内容

- キャンパス規則、サービス(図書館サービス)
- 学習技術(ノートの取り方、時間管理、時間管理、図書館検索、情報技術等)
- 自己、小説リーディング
- リサーチペーパーライティング
- 海外学習 体験学習
- 特定の問題について(アルコール、ドラッグ、ドライビング、デートレイブ、セクシャルハラスメント等)

アメリカ1年次教育調査2002年

- 対象校：4年制大学1358校 460校から回答
- 質問紙調査内容
 - ①大衆化過程での学生の変化
 - ②学生の多様化に対応したカリキュラムの内容と関係に関して
 - ③具体的な教授法と学習支援策との連携
 - ④学生への効果とその測定
 - ⑤一般教育との関連性、連携性
 - ⑥現状と問題点

カーネギー分類による回答校の内訳

カテゴリー	校数	割合
Liberal arts	31	13.0%
Master's	12	4.9%
Doctoral I	12	4.9%
Doctoral II	2	0.7%
Research university	21	8.2%
Scholarship	18	6.9%
Service-oriented	3	1.1%
Other specialized	1	0.4%
合計	105	40.9%
不明	38	14.6%
不明	263	100.0%

1年次教育内容の重視度 1~5 (5が最高)

内容	1	2	3	4	5
基礎的知識の習得	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0
応用的知識の習得	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0
基礎的スキル	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0
応用的スキル	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0
基礎的知識の活用	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0
応用的知識の活用	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0
基礎的スキルの活用	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0
応用的スキルの活用	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0
基礎的知識の習得	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0
応用的知識の習得	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0
基礎的スキルの習得	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0
応用的スキルの習得	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0
基礎的知識の活用	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0
応用的知識の活用	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0
基礎的スキルの活用	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0
応用的スキルの活用	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0

内容重視度内訳

内容	重視していない	重視している	両方重視している	両方重視していない
基礎的知識の習得	9	19	24	24
応用的知識の習得	21	45	57	82
基礎的スキルの習得	31	67	84	106
応用的スキルの習得	127	274	345	511
基礎的知識の活用	180	339	489	1000
応用的知識の活用	368	793	1000	1000
基礎的スキルの活用	95	205	260	460
応用的スキルの活用	483	1000	1000	1000

日本における導入教育の課題

- ①1年次教育と1年次支援プログラムの統合の欠如
- ②教務、学生サービス、図書館司書、キャリアなどリソースとの連携不足
- ③縦割り組織の限界

事例報告 1

慶應義塾大学日吉メディアセンターにおける「情報リテラシー教育」への取り組み

市古 みどり (慶應義塾大学日吉メディアセンター)

日吉キャンパスの特徴と日吉メディアセンター

- 「総合政策学部」「環境情報学部」「看護医療学部」を除く文・経済・法・商・医・理工学部の1・2年生11,000人が在籍する。
- 一専門教育課程へ進む前の学生が中心のキャンパス
- 施設には5つのキャンパスとメディアセンターがあり、基本的に学生はそれぞれのキャンパスの資料や施設を利用することができる。
- メディアセンター専任14名、嘱託(3年契約)2名、うち司書資格保持者12名、経歴などにより、情報リテラシープログラムのいくつかを担当している。
- 蔵書数約70万冊、資料購入費(学生用)7,000万円
- 1日平均入館者数3,300人、年間貸出冊数17万冊

情報リテラシー教育プログラムの展開

- 1996年 メディアセンター中・長期ビジョン 情報リテラシーを全学生に浸透させること レベル毎に段階的に取り組んでいくこと 「情報リテラシー委員会」の発足
- 2003年 春季学期におけるプログラム 情報リテラシーガイダンス OPAC利用説明会、ライブライブラリー 情報リテラシー入門 情報リテラシーセミナー 新しいプロモーション活動 情報リテラシー教育プログラムホームページの開設

実績 情報リテラシーガイダンス 2004年度

- 出席者 新入生全員 約6,000名
- 新入生対象のガイダンス期間にインフォメーションテクノロジーセンターと協働で実施。
- ビデオ「情報の海に船出せよ」の上映および図書館サービスの紹介

実績 OPACセミナー 2004年4月8日～14日

- 35分のプログラム
- OPACの基本的な利用方法を説明するもの
- 45回実施
- 参加者は計 455名 (昨年度は703名)
- 2004年はライブライブラリーも開始
- 参加者は 230名+α

実績 講義「情報リテラシー入門」2003年度

- 文学部 3回 421人
- 経済学部 2回 254人
- 法学部(政治) 2回 485人
- 法学部(法律) 2回 609人
- 商学部 9回 775人
- 理工学部 20回 974人

「情報リテラシー入門」2004 講義テキスト 全64ページ

- 情報リテラシーを身につける
- 情報を収集する一歩先と入手
- 図書館を探す
- 雑誌記事を探す
- 新聞記事を探す
- 図書・雑誌・新聞以外の情報を探す
- インターネットの情報
- 情報を評価する
- 情報を活用する
- 図書館と著作権
- 参考文献の書き方
- 文献や情報を探すための資料とデータベース

実績 その他

- 情報リテラシーセミナー 6回 87人
- 適応教育部夏期スクーリング受講生のためのメディアセンター活用セミナー 3回 229人
- デジタルビデオ編集機器講習会 30回 46人

参考文献

- 上岡真紀子、「大学1年生の情報リテラシー能力の分析」日吉メディアセンターの試み」大学図書館研究 No.69, 2001 p.42-52.
- 山田雅子、「日吉メディアセンターにおける情報リテラシー教育の取り組み」MediaNet, No.10 2003, p.12-15

情報リテラシー教育プログラム

情報リテラシー教育プログラム

目的

① 情報リテラシー教育プログラムの目的

② 情報リテラシー教育プログラムの内容

③ 情報リテラシー教育プログラムの実施方法

④ 情報リテラシー教育プログラムの評価方法

⑤ 情報リテラシー教育プログラムの効果

⑥ 情報リテラシー教育プログラムの課題

⑦ 情報リテラシー教育プログラムの展望

⑧ 情報リテラシー教育プログラムの参考文献

⑨ 情報リテラシー教育プログラムのお問い合わせ先

⑩ 情報リテラシー教育プログラムのお問い合わせ先

2004年から始まった授業への協力と担当科目

- ・ 教養研究センターの設置科目「スタディスキルズ」
2003年秋季学期に実験授業がスタート、2004年に正式科目となる。
受講生は20人ずつ2クラス
問題(テーマ)の選択、読解(テーマ)に関する情報や資料の収集・収集、情報・資料の整理、整理した情報・資料に基づくディスカッション、評価、改善・修正
- ・ 湖南福沢キャンパスにおける「資料検索法」
メディアセンターの職員のみで担当授業

教育方法の变化

・ 競争になっている問題-「たとえば「死ぬ権利と生きる義務」が問題が必要か否か」「食物添加物の是非」を取り上げ、お互いの考えをディベート形式で伝え合う。最初の段階は主に立論、次に反論・反駁の仕方を学ぶ。

・ 倫理倫理、社会倫理、労働倫理問題を中心に、英語の活用能力を伸ばす。医療倫理は、ドクター・ハラスメント、インフォームド・コンセント、... 中略、社会倫理は、国際結婚、中絶問題、... 中略、労働問題は、モラル・ハラスメントやセクシャル・ハラスメントなどを扱う。英語で文献を読み、分析、討論、発表していきながら...

平成16(2004)年度度徳島大学経済学部外国語科目履修案内より

・ 大学では「自ら考え、選び、学ぶこと」が求められます。これは学問研究の出発点であると共に良い人生を送る上で不可欠な「教養」といふ知的基礎体力を身につけるための基礎でもあります。そこでこの「自ら考え、選び、学ぶこと」の体得を目指して、読解意識の喚起、具体的な読解発見に始まり読解解決に至るまでに必要とされるさまざまな学問的・社会的・実務的のためのスキルを身につけることがこの授業の目的です。

平成16年度 徳島大学(日吉)2004年 読書要領・シラバス

・ 情報収集と情報管理という活動がグループワーク全体の流れの中でどのように位置づけられるか、情報が議論やプレゼンテーションと深く関わっていることがわかります。情報は、議論をする上で、またグループワークの結果であるプレゼンテーションをする上でなくてはならないものです。

・ SFCの学生たち(Inspiration on Groupwork)が出版した、「グループワークハンドブック」1994 p.53

変化する教育 vs 受け身図書館

・ 教員との連携が取れていない
図書館は期待されていない?
実は教員が図書館を知らない?
・ 読解、資料収集方法、サービス内容
授業を受け持ったとしても、図書館のサービスについてのみ話す機会を与えない、与えられているといった態度
図書館も教育現場で起こっている変化に順応
課題を出された学生の質問によって知られる
図書館員同士でもこうした変化への対応について今とどこも共通認識を持っていない。
・ 資料の収集・保存方針・提供方法に変化が起きない
→ 題目としての、「教育・研究・医療のサポート」に留まっている。

日吉メディアセンターの役割

- ・ 学習サポートのための図書館
- ・ 情報リテラシー教育プログラムもその1つ
- ・ 図書館資料はコレクションという枠で見るととらえてみる可能性を持つが、今現在行われている学習のための資料収集を強化してもよいのではないか。
- ・ (機能が異なる三田メディアセンターの存在がある)
- ・ 教養教育段階の学生に対する図書館の存在意義

課題

- ・ 情報を扱う専門家としてアビール
- ・ プログラム全体の見直し
- ・ 実験にスタートした1997年当時から現在に至るさまざまな環境の変化を考慮しながら、メニュー、方法、コンテンツ、実施時期の見直しを行う。
- ・ 図書館業務とのバランス
1年生6,000人に対して今後この方法で維持できるか?
効果、成果が期待できる方法はほかにないか。
- ・ 5キャンパス5つの図書館を持つ総合大学という環境を活かし、連携したプログラム、資料の開発
- ・ 参加する学生のインセンティブとなる物を探す

事例報告2

三重大学附属図書館における教育支援事業としての情報リテラシー

～学部初期の「授業と連携した」情報リテラシーを中心に～

杉田 いづみ (三重大学附属図書館総合情報係)

情報リテラシー教育支援の戦略(1)

① 三重大学中期目標・中期計画

- ・ 教育目的:
 - ・ 国際的に活躍できる人材「問題解決力」「問題解決能力」研究能力が卒業時に必要とされる。
- ・ 教育の実施体制等に関する目標(学術情報基盤)
 - ・ 電子情報サービスの充実、図書等資料の整備に努めるとともに、新たな図書館形態の創設と情報リテラシー教育の充実強化を図る。

情報リテラシー教育支援の戦略(2)

① 大学図書館の使命・根本に立ち返る

- ・ 大学図書館=教育・研究を支える機関
- ・ 教育(Education)ではなく、教育支援(Instruction)と捉える

② 新しい形の支援・サービスを創出

③ 情報リテラシーによって大学を変えていく

- ・ 学習・教育の在り方を変える
- ・ 研究活動を支える
- ・ 地域貢献の柱となる

⇒ 三重大学における情報活用文化を育成

情報リテラシー教育支援の戦略(1)

① 情報リテラシー事業に重点を置いた組織編制

- ・ 情報リテラシーを担う参考調査係の強化
 - ・ 委員および専任職員間の協働体制による連携
 - ・ IT担当の専任の設置
 - ・ 教育体制強化
- ・ サービスカウンター・事務室統合
 - ・ 貸出カウンターと参考カウンターの統合、事務室統合によるサービスの高度化・効率化

情報リテラシー教育支援の戦術(2)

目的・対象に応じて3つのセグメントに分類

- 学習・教育支援(学生)→学生ポータル
- 学習・教育支援(教職員)→教育ポータル
- 地域貢献(一般市民・地域組織機関)→地域貢献ポータル

教育支援、研究支援の成果を効率的に還元

多様なメニューによる 対象の拡大 + 内容の高度化 → 各セグメントごとのポータルサイト構築

教育支援としての情報リテラシー「授業と連携した」情報リテラシーの実践

目的

- 大学の「教育改善」に貢献する
 - 情報リテラシーの全般的レベルの向上 (効率化・サービス提供)
 - FD、JABEE等)認定対応、シラバスへの掲載
 - 「情報を使う力」を顕微鏡した授業への展開

方策

- 授業とのタイアップによる情報リテラシー教育支援
 - 図書館ツアー(学部1年前期)
 - 情報科学基礎における情報検索入門(学部前期履修1-2年)
 - ゼミ・研究室における情報検索講習会(卒学生3-4年一院生)
- JABEE: 日本技術者教育認定機構

共通教育必修科目における情報リテラシー教育支援

全学必修科目「情報科学基礎」

- 2001年〜 三重大学が学部30クラスほぼ全てにおいて採用
- 内容
 - 情報リテラシーは、大学生・社会生活で必須の能力
 - インターネット(検索エンジン)と学術情報(図書館提供データベース)の活用
 - 履修検査(OPAC、WebcatPlus)の検索技術と検索履歴、及び「情報の入手方法」
- 目標
 - 授業のレポートやディベートに必要な知識とスキル
 - 図書館を使ってみようという気持ち

図書館利用教育ガイドライン 一大学図書館編ーに沿った実施モデル Ver.2

学部前期履修情報リテラシー教育支援のモデルケース(人文学部の例)

実施時期	実施内容	実施場所	実施担当者
2001年12月	図書館利用教育ガイドラインの策定	図書館	図書館員
2002年1月	図書館利用教育ガイドラインの周知	図書館	図書館員
2002年2月	図書館利用教育ガイドラインの実施	図書館	図書館員
2002年3月	図書館利用教育ガイドラインの振り返り	図書館	図書館員

情報検索講習会に対する評価 学生からの評価(1)

学生アンケート(講習会前・講習会後・全体の感想)

インターネットの利用について

- 2001年から2002年で普及から使っている学生が増加
- 2002年から2003年で増減

情報リテラシーについて

- 2001年から2003年で元々の知識はほとんど変わらない
- 講習会後の理解は、変化より明確にし、ポイントアップ
- OPACについて…コンピュータベースを目指す
- 2001年から2003年で元々の知識はほとんど変わらない
- 講習会後の理解は、実習課題の工夫により、ポイントアップ

情報検索講習会に対する評価 学生からの評価(2)

学生アンケート(講習会前・講習会後・全体の感想)

論文の探し方

- 2001年から2002年で理解度が落ちてしまった
- 文庫DBの実習ができずテキストのみで学習効果が低かった
- 必要としている情報・文献が探せるか
- 2003年は「探せそう」が9割を超えた
- 参考文献の読み方やインターネット情報の探し方に切り替えた
- 全体の理解
 - 「よくわかった」の割合が2001年から2003年で高くなった
 - 講習会後のフォローアップ(学生ポータル・メールマガジン)

情報検索講習会に対する評価 教官からの評価

教育評価アンケートの実施と結果

実施目的

- 「国立大学法人化」、「教育改善」の進行、高校の必修科目「情報」の開設など内外の事情の変化に対応
- 専任体制としての内容、内容・方法の見直し

実施時期

- 期間: 2002年11月29日〜12月10日
- 対象: 2001年以降に共通教育科目「情報科学基礎」等で年度図書館での情報検索講習会を修了した学生
- 回答数: 445(人)、教: 12、国: 1、工: 8、生: 10(実習6回の必修)

実施形式

- Web上のアンケートフォーム(全10項目、選択および記号式)

評価アンケート結果(1) 講習会の内容

評価された点

- 重要: 図書館の全体感+情報検索+学生の参加に有益
- 内容: 学生の学習・修得に合ったテーマ設定
- 資料: 適切・簡潔・分かりやすいテキストとして使える
- 時間配分・質疑: 実習時間が過剰・2003年は改善された

課題 (分野別・クラスの違いによって異なる)

- 内容: 高度すぎる・早すぎる
- 課題: 他のコマ(教育の実践内容)との重複があった
- 時間配分・質疑: 実習時間が足りなかった

OPAC+WebcatPlusの活用(2004年12月リリース予定)

評価アンケート結果(2) 講習会の方法・講師

評価された点

方法

- プロジェクトを使った丁寧な説明の後、実習に接続させる手法は学生の理解度を高める上で非常に有効(英・経)
- プレゼンテーションの見本になった
- 具体的なテーマによる例示や実習が良かった

講師について

- 丁寧・親切・明確・迅速・積極(補助の役割も)
- ゆとり大きな声という基本が守られていた
- パソコン・メールキーの学生からも好評

評価アンケート結果(3) 講習会の方法・講師

課題として指摘された点

方法

- 全員が一斉に講義実習した方が効果的(OPAC+WebcatPlus)
- 教室の後ろの方が見えづらかった・聞こえづらかった
- 複数教室を同時使用する場合は、それぞれ講師を立てるべき

講師について

- 慣れた態度(緊張していた?)
- 教育実習生は経験が浅くかつ学生は興味を持って聞きたがらない
- 学生に対する敬意と礼儀
- 話は丁寧、自分(教官)と比べるとあまり良くなかった

評価アンケート結果(4) 講習会の効果

評価された点

- 「とても効果があった」理由
 - 講習会を受けた学生のレポートの質が格段に良かった
 - 通常の2コマ以上に低コストで内容を理解させられた
 - 具体的な使い方を示されて、サービスを把握させるだけで学生にとっては有利、講習会の意義は大きい
- 「効果があった」理由: 学生の反応から
 - 役に立っていた=知識を蓄積できた=自身の効果
 - 「役に立った」という学生の声も聞いた
 - 講習会後「ぜひ使っていきたい」という学生が何人いた

評価アンケート結果(5) 講習会の効果

「効果があった」理由: 教育的観点から

- 出席する例にとって大変助かった(=教育支援の成立)
- 履修検査の方法は知能活用が不可欠(コンピュータベース)
- 大学の勉強・研究の基礎(不可欠な技能(=学生の利益))
- 学生の満足度が非常に高い

課題として指摘された点

- 効果検証の遅しさと時期の点から
 - 1回の講習会が効果を確立するものではない
 - 「役に立った」というだけでは「大学は変わったか?」という
 - 学習分野や目標とする到達点によって異なる

評価アンケート結果(6) 図書館ツアー後の講習会の効果

評価された点

共通した理由

- 図書館の設備、利用方法を知った上で、更に情報検索の学習を学ぶことは有意義

人文学部の場合

- ゼミなどのような問題発見・解決型の授業の一環として図書館ツアーを行うのは適切
- ゼミと共通教育科目は大学で学習するための基本的な知識を身につけるための準備となる(より効果を上げるための授業の進捗状況に合わせたタイミングで実施したい)

評価アンケート結果(7) 講習会実施後の報告・フォローアップ

評価された点

図書館からの学生アンケート結果報告について

- 報告が速い・丁寧・適切・報告内容として充分
- 結果の速報により、受講学生に安心感を引き継ぎ持たせることができた

教育によるフォローアップについて

- 学生ポータルにおいて重点的に掲載
- 図書館からは充分、教育としてのフォローアップについては足りないと感じる
- 特にフォローアップが必要と思えない、必要があれば個人個人が図書館で相談したり、カウンセラーと話し合い

評価アンケート結果(8) 講習会の効果・達成度の評価方法

テスト票の意見

- 参加意欲向上のために、もう少し緊張感があってもいい
- 講習会終了後の理解度を本当に確認するであればテスト形式にする
- JABEE認定の観点上、成績を客観的に評価する必要性

アンケート票の意見

- 試験の時間を取るよりも、使い方を指導してもらったほうが良い
- 知識をそこでも身につけることより図書館の様々な可能性について疑問を伝えることが重要

評価アンケート結果(9) 講習会の効果・達成度の評価

◎ **その他の意見**

- ◎ 採選目的の設定
 - 講習会の効果や達成度は何によって計るかが大きな問題
- ◎ 教育との関連づけ
 - 講習会の効果は、むしろその後の各コースや専攻における指導や教育に関わっている
- ◎ サービス検討との相関関係
 - 図書館サービスなどの程度の学生が使うのか?
 - 講習会をするとサービス利用度が上がるのか?

評価アンケート結果(10) 高校の教科目「情報」について

◎ 「内容の変更が必要」「検討が必要」

- コンピュータリテラシーについて
 - PC操作のレベル高、情報処理に関する上位レベルのスキル
- レベルによるクラス分けの必要性
 - 「情報」の受講と「理解」していることは別物と考えべき
 - 講習対象者をアンケートやテストでレベル分けすべき
- ◎ 内容の検証と改訂の必要性
 - 「新しい段階での情報リテラシー検定」「著作権」「引用方法」
 - 「情報の検証・評価」探し出せることと有用であることの違い
 - JABEE受審インシタスの再検討が指摘されている

評価アンケート結果(11) 高校の教科目「情報」について

◎ 「なんとも書けない」「その他」

- ◎ まずは様子を見たい
 - どの程度のレベルの知識と技術を習得しているか不明・予測できない
 - 高校の授業に関わらず学生の「スキル」は日々向上している
- ◎ 「情報科学基礎」そのものについて
 - 内容も含めた「情報科学基礎」そのものの在り方が問われる
- ◎ 「リテラシー」の捉え方
 - コンピュータリテラシーは必要なくなるのでは
 - パソコンの使い方を習得していてもどこにアクセスすればいいかわからないだろう。共通教育・学部別のリンクが欲しい

評価アンケート結果(12) 次年度以降の採用について

◎ 「ぜひ採用したい」「採用したい」

- ◎ 学習・教育の観点から
 - 導入生・学部初級段階で必須不可欠(大学のリソース利用)
 - 授業内で取り込まれた授業を想定内に広げられた
 - 履修単位取得の扱いの方を見よと指摘する声も出ていた
 - 来年度からの授業科目に図書館情報講習会を明記
- ◎ 図書館利用の観点から
 - 大学に上りて図書館を会場、シラバス提出前に授業中に上げるのは学生にとってリット
 - 図書館の利用を促進するためにも有用

評価アンケート結果(13) 次年度以降の採用について

◎ より高い効果をもつ観点から

- 内容については是非採用したい。方法は検討の余地あり
- 講習料と講習後に課題を出す(事後は少しレベルを上げて)

◎ 「採用したくない」

- 講義の内容が「情報検索講習会」の内容が一致しない
- 質疑応答は一度と専任員は「分室」ですべき?

⇒ 学生(学習)・教育(教育)のニーズに合った在り方を再検討し、よりよい方案を策定

評価アンケート結果(14) 情報検索講習会全般について

◎ 教育の役割について

- 講義の内容とリンクさせて講習を行うことで、身に付きやすいと思う。この点に照しては数々講義担当教育も反省すべき
- 授業で情報科学基礎の担当教育がいかにかフォローするのか大切。そのためのアンケート結果を早い時期に教育と図書館職員が共有する必要がある
- 図書館講座の間に図書館での調べもの必要とするようなレポート課題を学生に与え、図書館講座ではそのテーマに合った本を探すという方法が有効ではないか?

⇒ 教育実働による、教育とのパートナーシップ
教育実働における図書館の明確な役割づけ

評価アンケート結果(15) 情報検索講習会全般について

◎ 講習会の意義・位置づけ

- 学生には大抵の講習会、必ず継続してください
- 採られた人的資源の中で有効に活用されていると思う。資料のカリキュラムの中でその位置づけを検討したい
- 情報リテラシーの範囲にセキュリティ、倫理観なども盛り込むべき。大学の責任として、原資料そのものとしての「真実性」もその内容で扱ってほしい

⇒ カリキュラムの中で位置づけ
(各教育 → 各学部・学科 → 大学全体)

評価アンケート結果(16) 情報検索講習会全般について

◎ 学習・研究のレベルに合わせた講習会

- 1度だけの講習会ではなく、一冊の中で段階的にテーマ別に知識を定着させる方法を検討してほしい
- 研究員や専攻生に向けた講習会も多く開催してほしい。特に専攻レベル
- 化学系では、Chemical Abstract、2年次で本館に学生が利用しければ理想であるが、現状だと4年の基礎研究以降になるので、3年次後期か4年次前期がよい

⇒ 学習・研究に連した時期、各専門分野に合わせたメニューの用意(カスタマイズ)

情報リテラシー教育支援 評価のまとめ

◎ 評価の観点

- 学生からの評価(サービスの受益者)
- 教育からの評価(サービスの提供者/受益者)
- 利用統計からの評価(サービス利用状況の状況)
- 自己評価(サービス提供状況の状況)
- 外部評価(講師認定やコース認定も検討すべき?)

⇒ リテラシー関連サービスの評価は、図書館サービス全体の中で考える必要がある

なぜコア・コンピタンスか? =PDCAサイクルを生み出す

◎ Plan (企画) - Do (実行) - Check (評価) - Action (改善)

サービス 評価・見直し 利用者のニーズ

次のフェーズへ! より高度なサービスを 企画・実行...

戦略的スパイラル循環

図書館の運営全般に関わる拡大再生産的サイクルの応用(特効薬) = コア・コンピタンス (※万葉集)

※ PDCAサイクルとは継続的に改善を促すためのプロセス

マーケティング理論をどう生かすのか? ニーズ把握-ニーズ先取り-顧客満足

◎ 非営利機関のマーケティング理論

- 生き残り、成功するために充分な資源を吸引する
 - 学所情報基盤の確立・コンテンツ構築
- 資源を製品、サービス、メディアに変換する
 - 学所情報サービスの構築
- アウトプットをさまざまな消費公共に流通させる
 - 情報リテラシー教育支援事業の充実強化

顧客(一学生・教育・地域)の学習・教育・研究活動との接点

顧客(一学生・教育・地域)の顧客(一学生・教育・地域)との接点

人と学術情報との関わり合いを支援 ライフサイクルに合わせた多様なメニュー

◎ 図書館が得意に実施する 内容の高度化 投資と連携する情報リテラシー教育支援事業

教育個人用	教育・大学新生と対面する	研究	研究
教育個人用	専門的リテラシー教育支援	研究	研究
教育個人用	卒業論文など、修業に必要とした情報リテラシー教育支援	研究	研究
教育個人用	卒業論文など、修業に必要とした情報リテラシー教育支援	研究	研究
教育個人用	卒業論文など、修業に必要とした情報リテラシー教育支援	研究	研究
教育個人用	卒業論文など、修業に必要とした情報リテラシー教育支援	研究	研究

一般図書、地域専門館別開館日

情報リテラシー教育支援の戦略 -再び- “競争と連携の時代”の中で

◎ 大学図書館の使命・根本に立ち返る

- 大学図書館 = 教育・研究を支援する機関
- 大学の使命を果たすのに必要な機関

◎ 情報リテラシーによって大学を豊かにしていく

- 学習・教育の在り方を変える
- 研究活動を支える
- 地域貢献の柱となる

⇒ 自らの大学が求める 情報リテラシーを 各々が企画・実行する

※ 情報リテラシーを担った図書館員は、職業道徳も求められる
※ 情報リテラシーは一日にして成らず(孝経)徳教の要

図書館学教育部会研究集会に参加して

佐藤 允昭 (別府大学文学部)

朝一番の飛行機で上京。羽田からまっすぐ日本図書館協会会館へやってきてどうやら午後の研究集会に間に合った。

会場に入って真っ先に感じたのは閑散とした雰囲気。テーマがタイムリーであり、関心を持つ会員も多いのでは、と予想していただけに意外。開催日がゴールデンウィーク初日というのが理由かもしれない。

対照的にプログラムの内容は充実していた。

はじめは、ご自身、大学導入教育担当の経験をお持ちになっている山田礼子氏の基調講演。各種調査結果を交えて最新の情報を提供された。わが国の課題として、縦割り組織の限界や位置づけのあいまいさを指摘されたが、私も普段感じていることであり同感。

後日インターネットで検索したところ、山田氏には「アメリカの経験に学ぶ—高まる導入教育の必要性」など関連する論文・講演記録が多数あることがわかった。

次いで事例報告。

市古みどり氏と杉田いづみ氏が、それぞれの事例を報告した。両者に共通するのは、教員との連携と情報リテラシー教育である。これまでの図書館利用教育の概念を超えて、授業とのタイアップによる情報リテラシー教育支援という形式で実施されている。当然、担当する図書館員には、情報を扱う専門家としての力量が備わっていないといけない。どんな場合にも言えることだが結局は人材である。

二人の自信あふれる報告を聞きながら、「こんな図書館員がうちの図書館にいるかなあ」とおもわず口に出さずにつぶやいた。

研究集会に参加して：元気な図書館員が大学教育を変える

堀川 照代 (島根女子短期大学)

4月29日の総会に引き続いて開催された研究集会「大学導入教育にみる大学改革への挑戦：司書の可能性と限界」に参加した。大変興味深い示唆に富んだ内容の講演および事例報告であり、40名余りの参加者だけで聴くにはもったいないと感じることしきりであった。

まず、基調講演「大学の導入教育における図書館員の役割」(同志社大学山田礼子氏)では、大学や学生の変化、導入教育の必要性などを聞きながら、日頃感じていることが整理され、大学教育における大学図書館および大学図書館員の位置づけが明確にされた。

続いて、慶応義塾大学日吉メディアセンター(市古みどり氏)と三重大学付属図書館(杉田いづみ氏)の情報リテラシー教育への積極的な取組みが報告された。

慶応義塾大学では情報リテラシー委員会が発足され、多様な情報リテラシー教育プログラムが展開している。そのなかの湘南藤沢キャンパスの「資料検索法」は、メディアセンターの職員のみで担当しており、今年は93名の学生が登録しているという。

三重大学図書館では、情報リテラシー教育支援を重点事業と位置づけ、組織編制を強化し、授業との連携を進めている。注意を引いたのは、教官からの評価アンケートの結果に、「餅は餅屋＝教官と事務官は分業すべき(?)」とあったことである。授業の場に事務官が出てくるのは・・・、ということらしい。なにやら、学校司書が教員ではないから指導してはいけないとかつて言われたことと同様の図式であり、「大学図書館よ、おまえもか」と言いたくなる。

同様に、司書教諭が教育課程に学校図書館活用教育を位置づける役割をもつことと対応させると、大学の図書館情報学担当教員は、大学教育カリキュラムに情報リテラシー教育を位置づける役割が期待されるということになるのだろうか。フロアから「元気な女性の図書館員」という発言があったが、はて、元気な図書館員にとって、図書館情報学担当教員にそのような役割を期待しているのかいないのか、気になるところではある。

図書館学教育部会 平成16年度 第1回研究集会アンケートより

(アンケート回収数 19 参加者数 39 回収率 49%)

質問1. 部会員かどうかお聞かせ下さい。

日本図書館協会会員・教育部会会員	9名
日本図書館協会会員・教育部会非会員	4名
日本図書館協会非会員	6名

質問2 今回の研究集会のテーマの設定はいかがでしたか。

適切 19名

適切でなかった	0名
どちらともいえない	0名

質問3 今回の研究集会の内容はいかがでしたか。

適切	19名
適切でなかった	0名
どちらともいえない	0名

質問4 今回の研究集会に関してご意見・ご指摘等、自由にご記入ください。

導入教育というテーマは良かったと思いました。今回の記録もほしいと思います。
先行事例すぎて、自分の置かれている現場について考えさせられました。
大学の教育改革の流れの中で、適切なテーマ設定で関心ももてた。図書以外のメディアが発達する中で「情報リテラシー」教育のあり方が問題だと思われる。インターネット検索に学生が習熟すればするほど、学生は図書館に近寄らなくなるなどの問題。
小学校の図書館に関わっていて、今日のお話を小学校(あるいは高校まで)の情報リテラシーにおきかえながら、伺いました。
大学の講義に参加した経験から、図書館学のカリキュラムにかなりばらつきがあり、同じ「司書」資格をもっている、内実には差があることを感じる時があります。図書館学の専門性を高め、充実が図られればよいと思います。
情報リテラシー教育を担当することを想定した演習科目を設けることは有効な手段の1つとなりそうだ。
図書館員が主題担当制をとらないと、効果的な導入教育は困難ではないだろうか。しかし、状況は、ジェネラリスト指向へ流されている。どうするか? 実績をつんで、評価を高めて、より上の目標への参加のステップを確保するしかない。
図書館の業務モデル・教育モデルの中で、2件の事例はすばらしいと考えます。熱意と努力の結果の賜物と存じます。個人の適性もあると思います。
大変参考になりました。先行事例の紹介をお聞きして、激動の時期に何を指針に業務モデルを確立していくか、「情報リテラシー支援」、「導入教育支援」がキーワードとなることを大胆に進める必要を再確認した。(現場職員です。)

市古さん、杉田さんの事例が大変おもしろかった。(聞きにくる価値があった!)
大変参考になった。
大変参考になりました。この内容は図書館学教育担当の教員だけでなく、全教員に知ってほしいことでした。
学ぶことが多く、感謝しております。
宣伝をもっと広く行くとよいのでは。

質問5 教育部会の活動全般に関して、ご意見・ご指摘等、自由にご記入ください。

せっかくの興味深い内容なので、案内をもう少し早くするなど工夫して、参加者をもっと増えるとよいと思います。
図書館の業務モデルと教育モデルをシリーズとして、次回は、他館種、差し当たり、公共図書館のビジネス支援を取り上げた。
教員中心の部会なので、もっと現場(司書)も一緒に議論していければと思います。
学ぶことが多く、感謝しております。
司書の実力検定、上級司書審査への方向づけ等の活動は大変望ましいことと賛意を表します。わが身を顧みて、ついでながら、図書館学教育者の資格も審査してはどうでしょうか。
(部会総会) 配付資料の単純ミスがあります。(発行日の付与なし、曜日、年等)
(部会総会資料別紙の) 上級司書(制度の検討の枠組み)の第1図 (http://www.jla.or.jp/keiei/20040331.pdf より転載)で、「認定」は?

編集担当 〒141-8642 東京都品川区東五反田 3-16-21 清泉女子大学文学部 司書・教職課程 斎藤陽子 Tel 03-3447-5551 (代表) Fax 03-3447-5493 (大学共用) E-mail: yk@is.seisen-u.ac.jp
--